

英国の大学における教員養成・教育実習

教職開発講座(教職大学院) 教授 小柳 和喜雄



2009年1月6日〜12日、平成20〜21年度専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム「実習到達度を明確にした実践的指導と評価法」により、英国へ調査に出かけてきました。このたびは、ロンドン大学とともに、現職研修、とりわけ管理職候補者・中堅のリーダーシップ養成の中心と言われているミッドランド・リーダーシップセンター「The National College for School Leadership (NCSL)」及び上記2機関と連携しながら、教員養成に力を入れているWolverhampton 大学等を訪問しました。

英国の教員養成・教師教育は、よく知られているように教師の職能成長を見通した「専門職としての教師に求められる資質能力」として、(1) Qualified Teacher Status、(2) Core、(3) Post Threshold、(4) Excellent Teacher、(5) Advanced Skills Teacher の5つのレベルを明らかにしています。これら5つのレベルは、①子どもとのコミュニケーションや関係作り、職能成長への見通しなどに関わる Professional attributes、授業力や評価力の知識・理解と関わる Professional knowledge and understanding、③ 具体的な専門的スキルと関わる Professional skills、という3つの基本カテゴリでそれぞれ構成されており、その5つのレベルの職能成長に即して、それぞれ連続して求められる資質能力規程が明らかにされています。つまり(1)〜(5)を縦軸とすると、①〜③の横軸で格子を構成し、それぞれの格子に、資質能力基準が示されているという

形になっています。そのため、教師になるための出発点として求められる(1) Qualified Teacher Status は、一番多く規程項目を持っています。そして、職能成長するに従って、規程項目の内容自体は高度なものとなりますが、基準としての項目数が減少していく(達成され内化されたもののみならず)形式となっています。

Wolverhampton 大学も例外ではなく、(1)の規程を満たすようにプログラムが生まれ、その達成を示すためのエビデンス(証拠)の提示(その所在情報)を、ポートフォリオを通じて示すようにされています。教育実習も、この基準を満たすべく工夫がなされ、各実習でどの日にどの場面で、これらの資質能力規程項目のどれと関わってその習得がなされたかを振り返って記述し、そのエビデンスを残していくための道具が用意されていました(振り返りを促す実習記録のノート、実習ガイダンスなど)。

そして、実習指導との連携が講義の中で緊密に図られるように、大学の講義室も、講義や講演のための部屋と、学校の教室・特別教室などをシミュレーションした形の教室、といった具合に多数用意されていました。そのため、実習前・実習後に、教室を想定した形で事前学習や事後学習の講義ができるように工夫されていました。

また、実習の評価に関しては3段階の仕組みになっており、まず実習生と実習校の指導教員が、(1)の規程に基づいてアレンジされた評価表を使って、毎日のような力を付けたかを評価し

ます。次に、学部の指導教員がその歩みのポートフォリオなどを参考にしながら、身につけた力を確認します。それらを経てきた実習記録や評価表などは、大学の直接指導に当たらなかつた教員がチームで評価し、評価が正当に行われているかを査定するという仕組みをとっていました。極めて厳密な質保証をする体制が取られているのを感じました。

さらに、このように明確にされた資質規程に基づいて、職能成長をモニターしながら進めていく取り組みは、現職研修やミッドランド・リーダーシップセンター「The National College for School Leadership (NCSL)」のインタビューを通じても感じられました。

この調査を通して、学部の教育実習と大学院における教育実習をつなぐ基準の明確化、それを支援する道具、質保証のための評価の仕組みや組織について、具体的な見通しを得ることができました。



Wolverhampton 大学の学部長・副部長と会談



学校の教室を真似た大学の講義室

児童の言語意識 育成のために



教職開発講座(教職大学院) 教授 吉村 雅仁

多言語化する教育現場と 外国語活動

文部科学省の発表によると、平成19年度9月現在、国内の公立学校に在籍する、日本語指導が必要な外国人児童生徒は2万5千人を超え(調査開始以来最多)、そのうち約1万8千人は小学校に在籍しています。全国の公立小学校数が約2万2千校ですから、単純に計算すると5校中4校にそのような児童がいることになりました。彼らの母語別構成を見ると、ポルトガル語、中国語、スペイン語の3言語で全体の7割以上を占め、フィリピン語、韓国・朝鮮語、ベトナム語がそれに続きます。

「厄介な存在」から 「貴重な存在」へ

日本語以外の言語を母語とする児童は、学級担任にとって「厄介な存在」かも知れません。何とか支援したいと思っても、児童や保護者が中国語やポルトガル語話者

の場合、為す術がないというのが現状だからです。総合的な学習の時間に、国際理解教育の一環としての外国語活動(次期指導要領では高学年必修)があるものの、原則として英語しか扱われません。実際、「国際理解」と称して英語活動を行いながら、児童の身近にある異言語・異文化の存在を無視していることに気づかない例も多く見受けられます。

このゼミでは数年来、国際理解教育を目的とする小学校英語活動の在り方について、実践を踏まえながら研究をしてきました。その結果、英語活動では、国際理解教育の課題に対応することが極めて困難であることがわかってきました。そこで現在、総合的な学習の時間等で、学級担任が使用可能な多言語・複言語教材の開発を行っています。日本語以外の言語を持つ児童の支援だけでなく、彼らを取り巻く児童の言語意識育成に役立つことを願っています。



写真上: 複言語教材を共に開発するゼミのメンバー
写真下: スペイン語収録風景(慶応大日吉キャンパス)

個別具体の 学びから



理科教育講座 准教授 常田 琢

階層化された自然

「ものの性質を知るには分解してみれば良い」というのが物理学の伝統的な考え方です。エンジンの仕組みを知るにはクランクとシャフトを取り出せば良い、原子を分解してクォークに分けてみれば良い、という立場から、クォーク―原子―物質―人間―大陸―地球―恒星系―銀河と連なる宇宙の階層構造が明らかにされてきました。

物理現象には、階層を超えた共通性が見られることがあります。ひげ剃りの泡は時間が経つとくつき合って粗くなりますが、岩石の形成時に粒径が粗くなる時と同じ法則に従います。また、不揮発メモリの一種である磁気バブルにも共通の性質が見られます。物理法則の普遍性には人を魅了するものがあります。

しかし、どんな法則も具体的な系を実験観察することでしか得られません。

ナノ世界の探索

私はこれまでナノサイエンスを研究してきました。原子のレベルで物質を設計することで、未知の特性を持った電子素子を作ろうとしています。原子・電子のふるまいは、非日常的であっても自然の一部です。遠い世界のこと想像できるような、日常的な応用を通して教えられればと思います。

教育は学際的な分野ですが、一つ一つを深く理解できていなければ、全体像を描くことはできないと実感しています。ゼミの学生には、将来役に立つかどうかを忘れて、好き勝手に何かを勉強する時期を持つて欲しいと思います。一つを深く掘り下げること、他の深さを想像できるようにする―これは自分の目標でもあります。



初代ゼミ生